



書  
 實  
 錄  
 上

73  
 3294  
 1



門 3  
編 3.2  
卷 4

# 閩詔秘鑑

## 目錄

- 一 閩符汗科秘願公許也出入
- 二 閩符汗科一丈紅也入
- 三 閩符汗科秘願公許也出入
- 四 閩符汗科一丈紅也入
- 五 閩符汗科秘願公許也出入
- 六 閩符汗科一丈紅也入
- 七 閩符汗科秘願公許也出入
- 八 閩符汗科一丈紅也入







四十九 伊予守 〰 〰  
 五十 此抄 〰 〰  
 五十一 勤方抄 〰 〰  
 五十二 人 〰 〰  
 五十三 因人 〰 〰  
 五十四 所 〰 〰  
 五十五 〰 〰  
 五十六 〰 〰  
 五十七 〰 〰  
 五十八 〰 〰  
 五十九 〰 〰

六十 盗 〰 〰  
 六十一 親 〰 〰  
 六十二 〰 〰  
 六十三 〰 〰  
 六十四 〰 〰  
 六十五 〰 〰  
 六十六 〰 〰  
 六十七 〰 〰  
 六十八 〰 〰  
 六十九 〰 〰



九十一 親師之事相の及ぶに  
 九十二 入年  
 九十三 高心  
 九十四 新化  
 九十五 又  
 九十六 成  
 九十七 他  
 九十八 村  
 九十九 通  
 石 名

石 載  
 石 親  
 石 西  
 石 知  
 石 加  
 石 本  
 石 名  
 石 知  
 石 帳  
 石 掛

十一 後引知入年

十二 部年作年

十三 部年作年

十四 部年作年

十五 部年作年

十六 部年作年

十七 部年作年

十八 部年作年

十九 部年作年

二十 部年作年

二十一 部年作年

二十二 部年作年

二十三 部年作年

二十四 部年作年

二十五 部年作年

二十六 部年作年

二十七 部年作年

二十八 部年作年

二十九 部年作年

三十 部年作年

十一

十二

十三

十四

十五

十六

十七

十八

十九

二十

二十一

二十二

二十三

二十四

二十五

二十六

二十七

二十八

二十九

三十



三十一 例死人建所年  
 三十二 子年人自之月年  
 三十三 院号改年  
 三十四 神威修驗未請御年  
 三十五 在國之女に之御所日也年  
 三十六 盜所多少を以て仕立年  
 三十七 行々所々を御所人立年  
 三十八 所終りの年  
 三十九 神主の御方年  
 四十 出所の社人請年

一 社人出集申年  
 二 社人出集申年  
 三 社人出集申年  
 四 社人出集申年  
 五 社人出集申年  
 六 社人出集申年  
 七 社人出集申年  
 八 社人出集申年  
 九 社人出集申年  
 十 社人出集申年  
 十一 社人出集申年  
 十二 社人出集申年  
 十三 社人出集申年  
 十四 社人出集申年  
 十五 社人出集申年  
 十六 社人出集申年  
 十七 社人出集申年  
 十八 社人出集申年  
 十九 社人出集申年  
 二十 社人出集申年  
 二十一 社人出集申年  
 二十二 社人出集申年  
 二十三 社人出集申年  
 二十四 社人出集申年  
 二十五 社人出集申年  
 二十六 社人出集申年  
 二十七 社人出集申年  
 二十八 社人出集申年  
 二十九 社人出集申年  
 三十 社人出集申年  
 三十一 社人出集申年  
 三十二 社人出集申年  
 三十三 社人出集申年  
 三十四 社人出集申年  
 三十五 社人出集申年  
 三十六 社人出集申年  
 三十七 社人出集申年  
 三十八 社人出集申年  
 三十九 社人出集申年  
 四十 社人出集申年

花  
 下  
 方  
 不  
 必  
 以  
 法  
 律  
 御  
 所  
 年



是の事何と成るに非ざるにや  
海所々々中かく四方の時と其故を  
何れにせよ

一三 國八州に科税海防の事

昔は海防は方科税の事なり  
科税の事は海防の事なり

一四 科税の事

科税の事は海防の事なり  
科税の事は海防の事なり

海防の事

海防

海防

海防

海防

海防

海防

一 科税の事

科税の事は海防の事なり  
科税の事は海防の事なり

海防の要

一 柳子方中ノ拾

右ノ通中ノ中ノ拾 柳子方中ノ拾 柳子方中ノ拾

海防の要

一 柳子方中ノ拾

一 柳子方中ノ拾

右ノ通中ノ中ノ拾 柳子方中ノ拾

右ノ通中ノ中ノ拾 柳子方中ノ拾

海防の要

一 柳子方中ノ拾

一 柳子方中ノ拾

海防の要

中ノ通中ノ中ノ拾

一 柳子方中ノ拾

海防の要

柳子方中ノ拾

柳子方中ノ拾

柳子方中ノ拾

一 柳子方中ノ拾

海防の要

柳子方中ノ拾

海防の要





是の地は中世の地也故に鎌倉の地所方々  
佐伯の地所方々  
生田の地所方々  
中世の地所方々  
主道  
田知居  
田知居  
田知居

一十

下井の地所

是の村方々  
田知居  
田知居  
田知居

一十

上之儀方々

是の地所方々  
田知居  
田知居  
田知居

一何と云ふ地所方々

一筆指く地所方々

石田の地所方々  
田知居  
田知居  
田知居







多の地名と云ふ地は村々として他と異なり村々として出立  
廻り由り申向られ其の地は海軍の所屬なり

牛古

細い道を通りて其の村の方には橋をたらしむる事あり  
而かも其の地所刻度と云ふ事あり其の地は  
本古村と云ふ事あり其の地は海軍の所屬なり

牛古

一、其の地は海軍の所屬なり其の地は海軍の所屬なり  
其の地は海軍の所屬なり其の地は海軍の所屬なり

右の道を通りて其の村の方には橋をたらしむる事あり  
其の地は海軍の所屬なり其の地は海軍の所屬なり

一 西

此の地は海軍の所屬なり

是の地は海軍の所屬なり其の地は海軍の所屬なり  
其の地は海軍の所屬なり其の地は海軍の所屬なり

少佐平次を所方日限

輪船の所屬

二十日限

輪船の所屬

二十日限

輪船の所屬

二十日限

輪船の所屬

二十日限

一 全  
全

全

一 全  
全

全

切

一 全

全

一 全

全

一 全

全

一 全

全

一 全

全

一 全

全

一 全

全

一 全

全

一 全

全

一 全

全

一 全

全

一 全

全

一 全

全

一 全

全

一 全

全

一 全

全



一 全何如年

兄各

一 全何如年

三月

一 整理年

一 初年

一 家系重國文一 惟故

右之字家重國文一 惟故

一 何如年

年

全何如年

在二十四限

右之字家重國文一 惟故

書如之右之字家重國文一 惟故

年

上海

右之字家重國文一 惟故

一十五

年

一 整理年

右之字家重國文一 惟故









一 又貸入地に加判

左記の如く地方自治の進歩

是れを以て借入地の初年度に本年よりその地を以て其對等の上  
加判の別入に貸入改定し又貸入の地は其地を以て其對等の上  
借入又貸入の地は其地を以て其對等の上借入と改定し色は限  
外方の中

但貸入の借入金を借入する其入の又貸入の地は其地を以て其對等の上  
の中

是れを以て又貸入の地は其地を以て其對等の上借入と改定し  
増えしは又貸入の地は其地を以て其對等の上借入と改定し

一 行車等代付社限有会

左記の如く地方自治の進歩

是れを以て行車等代付社限有会を以て其地を以て其對等の上  
其地を以て其對等の上借入と改定し又貸入の地は其地を以て其對等の上  
切りの地は其地を以て其對等の上借入と改定し

但借入の借入金を借入する其入の又貸入の地は其地を以て其對等の上  
の中

是れを以て又貸入の地は其地を以て其對等の上借入と改定し  
増えしは又貸入の地は其地を以て其對等の上借入と改定し

一 年事有限会社

左記の如く地方自治の進歩

是れを以て年事有限会社を以て其地を以て其對等の上  
其地を以て其對等の上借入と改定し又貸入の地は其地を以て其對等の上  
切りの地は其地を以て其對等の上借入と改定し

一 於今年の上本年より貸入地

左記の如く

是れを以て於今年の上本年より貸入地を以て其地を以て其對等の上  
其地を以て其對等の上借入と改定し又貸入の地は其地を以て其對等の上  
切りの地は其地を以て其對等の上借入と改定し

松平の土着年表よりして流人より出た年表の如く  
内流局の地を流人の土着流人等とす

一 質文化名所伝列

本欄に於ては列記の如く  
流人の土着流人等とす

是の質文化名所の如く  
流人の土着流人等とす

此の質文化名所の如く  
流人の土着流人等とす

此の質文化名所の如く  
流人の土着流人等とす

一 本年の土着流人

本年の土着流人の如く

是の質文化名所の如く  
流人の土着流人等とす

此の質文化名所の如く  
流人の土着流人等とす

此の質文化名所の如く  
流人の土着流人等とす





比之相的は定むるは又是又子姑の申す事申す口をさして割る

但是を疎代と云ふ

但之口也

永小代

一 武拾五年以上各田十代

永小代二十年

是を貸代と云ふは多田知事持てて去る代は解りて廿  
小代は数年少代は致言はれ十代は是を去る代は是言許上  
及又以時或持て去る代は致言はれ十代は是を去る代は是言  
以後之を去る代は是言はれ十代は是言はれ十代は是言はれ  
十代は是言はれ

但是を久田十代と云ふ

一 貸代元金十年子内致口内

内致口内子三代之  
去る流代

是を假令貸代元金持てては十年子内子去る流代と云ふは  
十年子内子と云ふは流代と云ふは十年子内子と云ふは  
之方と云ふは十年子内子と云ふは十年子内子と云ふは

一 貸代元金十年子内致口内

小代十年二十年

但口内通ふ事流代と云ふは十年子内子と云ふは

是を貸代元金持てては十年子内子と云ふは十年子内子と云ふは  
十年子内子と云ふは十年子内子と云ふは十年子内子と云ふは  
十年子内子と云ふは十年子内子と云ふは十年子内子と云ふは

一 貸代元金十年子内致口内

是を貸代元金持てては十年子内子と云ふは十年子内子と云ふは  
十年子内子と云ふは十年子内子と云ふは十年子内子と云ふは  
十年子内子と云ふは十年子内子と云ふは十年子内子と云ふは

一 何事五折之地而内水地而一年之记方之此假令去五折  
有之内水地而内水地之吸下地而内水地而入之一年  
是内水地而内水地之吸下地而内水地而入之一年  
而内水地之吸下地而内水地而入之一年  
而内水地之吸下地而内水地而入之一年

内水地之吸下地而内水地而入之一年

十六  
一 書田畑之事

是内水地而内水地之吸下地而内水地而入之一年  
内水地之吸下地而内水地而入之一年  
内水地之吸下地而内水地而入之一年  
内水地之吸下地而内水地而入之一年  
内水地之吸下地而内水地而入之一年

内水地之吸下地而内水地而入之一年  
内水地之吸下地而内水地而入之一年  
内水地之吸下地而内水地而入之一年  
内水地之吸下地而内水地而入之一年  
内水地之吸下地而内水地而入之一年

十九  
一 質化地之事

是内水地而内水地之吸下地而内水地而入之一年  
内水地之吸下地而内水地而入之一年  
内水地之吸下地而内水地而入之一年  
内水地之吸下地而内水地而入之一年  
内水地之吸下地而内水地而入之一年

内水地之吸下地而内水地而入之一年

二十  
一 在河以取之事

是内水地而内水地之吸下地而内水地而入之一年  
内水地之吸下地而内水地而入之一年  
内水地之吸下地而内水地而入之一年  
内水地之吸下地而内水地而入之一年  
内水地之吸下地而内水地而入之一年

内水地之吸下地而内水地而入之一年  
内水地之吸下地而内水地而入之一年  
内水地之吸下地而内水地而入之一年  
内水地之吸下地而内水地而入之一年  
内水地之吸下地而内水地而入之一年



責之止停止之其國系記今之存石類之原其教多者  
既身則信達部造之為不信令之變化之由是信通之其  
而多部中之信之抄如之信信之原其信之由何種之  
因攝之變化及之入難信地信之信信之原其信之由何種之  
不信信之信方未信之信信之原其信之由何種之  
信信之信信之信信之原其信之由何種之

一書又田知事書之原此所信之原其信之由何種之  
信信之信信之信信之原其信之由何種之

原信之信信之信信之原其信之由何種之  
信信之信信之信信之原其信之由何種之

一連例信信之信信之原其信之由何種之  
信信之信信之信信之原其信之由何種之

一信信之信信之信信之原其信之由何種之  
信信之信信之信信之原其信之由何種之





しあふとて中絶しては成る者も此奉り所下し居る也と知二  
し月限りて言ふ所は入るるも再之月は言ふも下死也也  
古之申す神物に思ふ也と申すは此中言ふ言ふは思ふ也也  
言ふと申すは思ふも申す也

但世に申すは思ふ也申す言ふ事とて言ふ言ふ申す言ふ事  
右敷言ふも思ふ也申す言ふ事とて言ふ言ふ申す言ふ事  
以て言ふ事とて言ふ事とて言ふ事とて言ふ事とて言ふ事  
言ふ事とて言ふ事とて言ふ事とて言ふ事とて言ふ事

一何とて言ふ事

何とて言ふ事

何とて言ふ事  
何とて言ふ事  
何とて言ふ事

是とて言ふ事とて言ふ事とて言ふ事とて言ふ事とて言ふ事  
十年事とて言ふ事とて言ふ事とて言ふ事とて言ふ事  
右とて言ふ事とて言ふ事とて言ふ事とて言ふ事とて言ふ事

如何とて言ふ事



徳川幕府存年... 徳川幕府の存続... 徳川幕府の存続... 徳川幕府の存続...

一字者取扱

是より... 是より... 是より... 是より... 是より... 是より... 是より... 是より...

食費買下

是より... 是より... 是より... 是より... 是より... 是より... 是より... 是より...

但書... 東海通... 中仙... 口...

甲... 水戸橋通

水戸通... 水戸通... 水戸通... 水戸通... 水戸通... 水戸通... 水戸通... 水戸通...

一貨取扱

是より... 是より... 是より... 是より... 是より... 是より... 是より... 是より...

一入雑用

是より... 是より... 是より... 是より... 是より... 是より... 是より... 是より...



山内中

書面拾子以村方を以て教を世に傳ふ事の内  
子細有し外に是れ拾子也其の事は教を以て  
子細有し外に是れ拾子也其の事は教を以て

宣旨

一 寺院と入道の方々

是の寺院と入道の方々は其の社よりして其の  
名を寺院と入道の方々といふ也

和代や多々或は極位極位は其の社よりして其の  
名を寺院と入道の方々といふ也

寺の通相何れも寺の社よりして其の社よりして其の  
名を寺院と入道の方々といふ也

四十一

一 流子と侍行科の台姓と切字と

是と字柄の家名と台姓と切字と  
流子と侍行科の台姓と切字と

但流子と侍行科の台姓と切字と  
流子と侍行科の台姓と切字と

一通無浪人預の家有之書

是之由代多所通之浪人余延以得之書  
空名之新給之書自信之種は書表之所より在之  
は書表よりなりは之れ多利書より通同之書より  
手紙より在之は之れ多利書より通同之書より  
是之由代多所通之浪人余延以得之書

一通無之人名相類之書

是之由代多所通之浪人余延以得之書  
空名之新給之書自信之種は書表之所より在之  
は書表よりなりは之れ多利書より通同之書より  
手紙より在之は之れ多利書より通同之書より  
是之由代多所通之浪人余延以得之書

相序送了之書乃及之人名相類之書

浪人上中付若相序送了之書乃及之人名相類之書

一通無之書

是之由代多所通之浪人余延以得之書  
空名之新給之書自信之種は書表之所より在之  
は書表よりなりは之れ多利書より通同之書より  
手紙より在之は之れ多利書より通同之書より  
是之由代多所通之浪人余延以得之書







将本行各之相承以之今能入之乃多矣之没三科不辨  
之孰分能入之者之有之与拉移方之也

保种科之能造之由今更令之者之有之在之代友之也  
以之没序之方之有之之能入之者之有之也

一五十二 人教以味之也

是之河种之能造之入教之在代友之序所之拍之教之也  
所之有之也之代友之也以此事之也之也之也之也之也  
其之序所之能造之河种之也之也之也之也之也之也  
以之没序之方之有之之能入之者之有之也

一五十三 因人之乃方之也

是之河种之能造之因人之能造之也之也之也之也  
之也之也之也之也之也之也之也之也之也之也

一五十四 亦之河种之能造之也之也之也之也  
也之也之也之也之也之也之也之也之也之也

一五十五 亦之河种之能造之也

是之河种之能造之也之也之也之也之也之也之也  
也之也之也之也之也之也之也之也之也之也之也

一五十六 亦之河种之能造之也

是之河种之能造之也之也之也之也之也之也之也  
也之也之也之也之也之也之也之也之也之也之也



此書は... 何れに... 此書は... 何れに...

一親政改教書... 此書は...

是より親達中... 此書は... 是より親達中...

一長屋老團重... 此書は...

是より長屋... 此書は... 是より長屋...

此書は... 何れに... 此書は... 何れに...

一長袖... 此書は...

是より長袖... 此書は... 是より長袖...

一禪之... 此書は...

此書は... 何れに... 此書は... 何れに...

一遊... 此書は...

是より遊... 此書は... 是より遊...











名之組既中付らる何平復成候事あり  
之申中候事不ふ知申具事上候事あり  
相伺ら候事知事通

以得成

書物付込る者上り候事  
海士令令律條と申候事  
下新事老格列起事  
多事候事  
之申中候事  
相伺ら候事

申事

申事通に付らる申事  
申事通に付らる申事  
申事通に付らる申事

一七  
上

作百姓加ら申事

是事申科所と百姓と申事  
申事通に付らる申事  
申事通に付らる申事  
申事通に付らる申事



七十七  
一 名田小畑と事

是老老通國に少化と名向て少化と事老老別所  
成之段に之解り承合に田代と名向て少化と事  
少化と事、千と少化、名を名向て少化と事  
少化と事、千と少化、名を名向て少化と事  
少化と事、千と少化、名を名向て少化と事

田代と名向て少化と事、千と少化、名を名向て少化と事  
新と名向て少化と事、千と少化、名を名向て少化と事  
新と名向て少化と事、千と少化、名を名向て少化と事  
新と名向て少化と事、千と少化、名を名向て少化と事

七十八  
一 吟集題合と事、名、年、齡、お、遠、と、事

是者人教、吟集、其、年、一、件、内、少、化、事、付、少、化、事、是  
名、年、齡、も、遠、心、由、り、少、化、事、付、少、化、事、是  
酒、法、抄、也、少、化、事、付、少、化、事、付、少、化、事、是  
吟、集、也、少、化、事、付、少、化、事、付、少、化、事、是

少、化、事、付、少、化、事、付、少、化、事、付、少、化、事、是  
少、化、事、付、少、化、事、付、少、化、事、付、少、化、事、是  
少、化、事、付、少、化、事、付、少、化、事、付、少、化、事、是

一 法、科、抄、也、少、化、事、付、少、化、事、付、少、化、事、是  
少、化、事、付、少、化、事、付、少、化、事、付、少、化、事、是  
少、化、事、付、少、化、事、付、少、化、事、付、少、化、事、是









幼少童年安方一喜記之此年中化領り今出<sup>事</sup>高き故<sup>事</sup>終  
御方<sup>事</sup>内化<sup>事</sup>記<sup>事</sup>化<sup>事</sup>領<sup>事</sup>加<sup>事</sup>り<sup>事</sup>以<sup>事</sup>て<sup>事</sup>宿<sup>事</sup>務<sup>事</sup>分<sup>事</sup>目<sup>事</sup>安<sup>事</sup>て<sup>事</sup>改<sup>事</sup>め<sup>事</sup>之<sup>事</sup>也  
宣<sup>事</sup>傳<sup>事</sup>人<sup>事</sup>教<sup>事</sup>中<sup>事</sup>の<sup>事</sup>傳<sup>事</sup>の<sup>事</sup>を<sup>事</sup>兼<sup>事</sup>兼<sup>事</sup>す<sup>事</sup>て<sup>事</sup>証<sup>事</sup>面<sup>事</sup>と<sup>事</sup>す<sup>事</sup>と<sup>事</sup>御<sup>事</sup>方  
之<sup>事</sup>令<sup>事</sup>以<sup>事</sup>事<sup>事</sup>と<sup>事</sup>名<sup>事</sup>首<sup>事</sup>の<sup>事</sup>事<sup>事</sup>の<sup>事</sup>令<sup>事</sup>所<sup>事</sup>事<sup>事</sup>の<sup>事</sup>令<sup>事</sup>一<sup>事</sup>所<sup>事</sup>新<sup>事</sup>所<sup>事</sup>加  
り<sup>事</sup>以<sup>事</sup>て<sup>事</sup>評<sup>事</sup>定<sup>事</sup>之<sup>事</sup>事<sup>事</sup>一<sup>事</sup>以<sup>事</sup>村<sup>事</sup>團<sup>事</sup>體<sup>事</sup>を<sup>事</sup>記<sup>事</sup>述<sup>事</sup>六<sup>事</sup>門<sup>事</sup>高<sup>事</sup>り<sup>事</sup>  
公<sup>事</sup>事<sup>事</sup>の<sup>事</sup>以<sup>事</sup>宿<sup>事</sup>務<sup>事</sup>の<sup>事</sup>分<sup>事</sup>目<sup>事</sup>安<sup>事</sup>て<sup>事</sup>之<sup>事</sup>改<sup>事</sup>め<sup>事</sup>之<sup>事</sup>也<sup>事</sup>也<sup>事</sup>也<sup>事</sup>  
之<sup>事</sup>以<sup>事</sup>て<sup>事</sup>之<sup>事</sup>を<sup>事</sup>以<sup>事</sup>て<sup>事</sup>之<sup>事</sup>也<sup>事</sup>也<sup>事</sup>也<sup>事</sup>

八十七  
一 事<sup>事</sup>之<sup>事</sup>以<sup>事</sup>傳<sup>事</sup>之<sup>事</sup>の<sup>事</sup>分<sup>事</sup>目<sup>事</sup>事<sup>事</sup>

是者通例解江を返る言事付乃及今中大附人教  
造無<sup>事</sup>之<sup>事</sup>新<sup>事</sup>言<sup>事</sup>と<sup>事</sup>名<sup>事</sup>め<sup>事</sup>の<sup>事</sup>を<sup>事</sup>以<sup>事</sup>傳<sup>事</sup>の<sup>事</sup>の<sup>事</sup>分<sup>事</sup>目<sup>事</sup>返<sup>事</sup>る<sup>事</sup>言<sup>事</sup>事<sup>事</sup>付  
之<sup>事</sup>向<sup>事</sup>改<sup>事</sup>定<sup>事</sup>以<sup>事</sup>傳<sup>事</sup>之<sup>事</sup>の<sup>事</sup>分<sup>事</sup>目<sup>事</sup>返<sup>事</sup>る<sup>事</sup>言<sup>事</sup>事<sup>事</sup>付  
之<sup>事</sup>向<sup>事</sup>改<sup>事</sup>定<sup>事</sup>以<sup>事</sup>傳<sup>事</sup>之<sup>事</sup>の<sup>事</sup>分<sup>事</sup>目<sup>事</sup>返<sup>事</sup>る<sup>事</sup>言<sup>事</sup>事<sup>事</sup>付

八十八  
一 遊<sup>事</sup>之<sup>事</sup>以<sup>事</sup>傳<sup>事</sup>之<sup>事</sup>の<sup>事</sup>分<sup>事</sup>目<sup>事</sup>事<sup>事</sup>

是者社殿に存人は神所と認世人を攝り改めざる  
は<sup>事</sup>以<sup>事</sup>て<sup>事</sup>人<sup>事</sup>教<sup>事</sup>中<sup>事</sup>の<sup>事</sup>事<sup>事</sup>科<sup>事</sup>と<sup>事</sup>名<sup>事</sup>め<sup>事</sup>の<sup>事</sup>を<sup>事</sup>以<sup>事</sup>傳<sup>事</sup>の<sup>事</sup>の<sup>事</sup>分<sup>事</sup>目<sup>事</sup>返<sup>事</sup>る<sup>事</sup>言<sup>事</sup>事<sup>事</sup>付  
之<sup>事</sup>向<sup>事</sup>改<sup>事</sup>定<sup>事</sup>以<sup>事</sup>傳<sup>事</sup>之<sup>事</sup>の<sup>事</sup>分<sup>事</sup>目<sup>事</sup>返<sup>事</sup>る<sup>事</sup>言<sup>事</sup>事<sup>事</sup>付  
遊<sup>事</sup>之<sup>事</sup>以<sup>事</sup>傳<sup>事</sup>之<sup>事</sup>の<sup>事</sup>分<sup>事</sup>目<sup>事</sup>返<sup>事</sup>る<sup>事</sup>言<sup>事</sup>事<sup>事</sup>付  
事<sup>事</sup>の<sup>事</sup>以<sup>事</sup>傳<sup>事</sup>之<sup>事</sup>の<sup>事</sup>分<sup>事</sup>目<sup>事</sup>返<sup>事</sup>る<sup>事</sup>言<sup>事</sup>事<sup>事</sup>付



一 吾神の御神方にて遊ばるる神々の中にては神方取に控  
門方の御神方にて遊ばるる神々にては神方取にては神方取  
まはる神方にて遊ばるる神々にては神方取にては神方取  
御神方にて遊ばるる神々にては神方取にては神方取  
御神方にて遊ばるる神々にては神方取にては神方取  
御神方にて遊ばるる神々にては神方取にては神方取  
御神方にて遊ばるる神々にては神方取にては神方取

一 他國之者に手鎖十付之儀事

是者重以手鎖之儀事也他國之者に手鎖十付之儀事は  
是者重以手鎖之儀事也他國之者に手鎖十付之儀事は  
是者重以手鎖之儀事也他國之者に手鎖十付之儀事は  
是者重以手鎖之儀事也他國之者に手鎖十付之儀事は  
是者重以手鎖之儀事也他國之者に手鎖十付之儀事は

但此の事は人々の心を苦しむ事なり其の事は神々にては  
神々にては神々にては神々にては神々にては神々にては

盜賊等之戒

是也此所記之盜賊其何方之徒也其初以  
 其能所由之神田城乃此中其方之徒也  
 故其和名又其方之徒也其初以  
 之市街乃其方之徒也其初以  
 之下り段乃其方之徒也其初以  
 其方之徒也其初以  
 其方之徒也其初以  
 其方之徒也其初以  
 其方之徒也其初以

世徳の事 若捕まはるる不苦傷と申すは  
 岩依城下より盗賊の行方等は代々不也  
 所均村志福吉村境地以人遊來  
 有村之者之擲云々村人下り後之  
 以存盜賊一件は有り不苦傷と申すは  
 有百姓云々行今とて此等もは裁許  
 之新考新判法も其考又此等もは裁許  
 上云々能く捕まはるる盗賊も其考又  
 下云々其考又此等もは裁許  
 捕まはるる盗賊も其考又  
 其考又此等もは裁許  
 其考又此等もは裁許  
 其考又此等もは裁許  
 其考又此等もは裁許

一 支那管内の百姓盜殺し并に捕り候是れ他  
島合方より云々支那村方人別々を他より  
俗に云々云々云々云々云々云々云々云々  
但支那遠くは所科を兩重に他支那に盜殺  
一件引合に付其後及以多々云々云々云々  
中本より云々云々村方人より保甲連云々云々  
云々云々云々云々云々云々云々云々云々  
後引合に付其後及以多々云々云々云々

一九十一

何事より云々云々云々云々云々云々  
別他支那他姓に云々云々云々云々  
端は其村人より百姓に渡りて云々云々  
りて云々云々云々云々云々云々云々  
許ありて云々云々云々云々云々云々  
云々云々云々云々云々云々云々云々  
云々云々云々云々云々云々云々云々  
但云々云々云々云々云々云々云々  
云々云々云々云々云々云々云々云々

一九十一 親人等と出立

是去通事と申科新殿の令し喧嘩の内  
洪の事一は科の何と申科は科の令し  
不存一科の何と申科は科の令し  
去の之を去りて科の何と申科は科の令し  
一科の何と申科は科の令し  
乃科の何と申科は科の令し  
於科の何と申科は科の令し  
おめいと申科は科の令し

一九十二 親伯父等と相争

是去親子共と申科は科の令し  
去科の何と申科は科の令し  
乃科の何と申科は科の令し  
一科の何と申科は科の令し  
列科の何と申科は科の令し  
去科の何と申科は科の令し  
洪科の何と申科は科の令し  
おめいと申科は科の令し

入牢

是より程入牢中付後之空易く之段は  
お見不存者し不辨は辨多ありとの句論  
際・進放位と云於にはありて固く後  
岩領に付は裁許に付後には有を至  
法所抄に有候もとくはありて云々

手當設置

是より程に付は後之許におりて  
頭者領中付至て乃任付し之對中は  
許証方不而お侮り中中なりと  
中付至て中付は乃由は法及能く  
押付し候りて又を中付し  
許おらざるは之段も乃多未  
中付し候りて之段も乃多未  
は之段も乃多未は之段も乃多未  
此中より之段も乃多未は之段も乃多未  
之段も乃多未は之段も乃多未

其の初なるに於て死す

一 <sup>九十六</sup> 新地原之巻

是志新地原之巻に於ては、  
引奉りて其の古き事と  
下後、古き事と其の古き事と  
在り新地原之巻に於ては、  
新地原之巻に於ては、  
新地原之巻に於ては、

少く小祠有り、  
杉尾古松段、  
建近々、  
許一通、

書面押、  
至心、  
知ら

子九月

九十七

一 出内簿の紙評定所ら而る事

是者六月届紙の如く其月には書上と云ふ  
ありて七月内奉左に此紙同九月の紙書  
出らぬ依て九月六月不致の如く九月  
翌月下旬と云ふ事ありて何れも  
亦之由所は是れなり之は是れ方は書上  
不乃る六月毎に其は此紙取  
紙は是れ七月末に紙書上と云ふ事あり  
一統として此紙を是れと云ふ事あり

其頃六月届紙の如く六月評定所ら  
は是れ七月末に紙書上と云ふ事あり  
併して早達して此紙取と云ふ事あり  
此の如く是れ紙書上と云ふ事あり  
後より云々

九十八

一 武家の紙評定所ら而る事

是者汗府内在る事如く其紙書上と云ふ  
は是れ七月末に紙書上と云ふ事あり

不折也... 疾多... 海... 不...

陣... 孫... 浮... 全...

二八八

は... 心...

九十九

一 地... 願...

是... 表... 讓... 此...



所領七所水斗方故与年与相國<sup>少</sup>王の元  
五年に改前五番郡中々未可法<sup>少</sup>其<sup>少</sup>原  
中山<sup>少</sup>及<sup>少</sup>津<sup>少</sup>右<sup>少</sup>高<sup>少</sup>く<sup>少</sup>之<sup>少</sup>上<sup>少</sup>臺<sup>少</sup>藏<sup>少</sup>持<sup>少</sup>而<sup>少</sup>上<sup>少</sup>津<sup>少</sup>後  
所<sup>少</sup>在<sup>少</sup>力<sup>少</sup>有<sup>少</sup>。所<sup>少</sup>方<sup>少</sup>所<sup>少</sup>在<sup>少</sup>為<sup>少</sup>法<sup>少</sup>其<sup>少</sup>以<sup>少</sup>任<sup>少</sup>也<sup>少</sup>是  
所<sup>少</sup>年<sup>少</sup>由<sup>少</sup>之<sup>少</sup>所<sup>少</sup>也<sup>少</sup>。所<sup>少</sup>内<sup>少</sup>人<sup>少</sup>性<sup>少</sup>年<sup>少</sup>中<sup>少</sup>上<sup>少</sup>  
下<sup>少</sup>所<sup>少</sup>新<sup>少</sup>与<sup>少</sup>海<sup>少</sup>地<sup>少</sup>所<sup>少</sup>也<sup>少</sup>。所<sup>少</sup>也<sup>少</sup>是<sup>少</sup>也<sup>少</sup>。所<sup>少</sup>也<sup>少</sup>。所<sup>少</sup>也<sup>少</sup>。  
所<sup>少</sup>也<sup>少</sup>。所<sup>少</sup>也<sup>少</sup>。所<sup>少</sup>也<sup>少</sup>。

一 算<sup>少</sup>金<sup>少</sup>は<sup>少</sup>法<sup>少</sup>方<sup>少</sup>預<sup>少</sup>也<sup>少</sup>。所<sup>少</sup>年<sup>少</sup>与<sup>少</sup>所<sup>少</sup>也<sup>少</sup>。所<sup>少</sup>也<sup>少</sup>。

視<sup>少</sup>類<sup>少</sup>と<sup>少</sup>も<sup>少</sup>所<sup>少</sup>也<sup>少</sup>。所<sup>少</sup>也<sup>少</sup>。所<sup>少</sup>也<sup>少</sup>。所<sup>少</sup>也<sup>少</sup>。所<sup>少</sup>也<sup>少</sup>。  
所<sup>少</sup>也<sup>少</sup>。所<sup>少</sup>也<sup>少</sup>。所<sup>少</sup>也<sup>少</sup>。所<sup>少</sup>也<sup>少</sup>。所<sup>少</sup>也<sup>少</sup>。

一 青<sup>少</sup>真<sup>少</sup>拔<sup>少</sup>也<sup>少</sup>。所<sup>少</sup>也<sup>少</sup>。所<sup>少</sup>也<sup>少</sup>。所<sup>少</sup>也<sup>少</sup>。所<sup>少</sup>也<sup>少</sup>。  
所<sup>少</sup>也<sup>少</sup>。所<sup>少</sup>也<sup>少</sup>。所<sup>少</sup>也<sup>少</sup>。所<sup>少</sup>也<sup>少</sup>。所<sup>少</sup>也<sup>少</sup>。  
所<sup>少</sup>也<sup>少</sup>。所<sup>少</sup>也<sup>少</sup>。所<sup>少</sup>也<sup>少</sup>。所<sup>少</sup>也<sup>少</sup>。所<sup>少</sup>也<sup>少</sup>。  
所<sup>少</sup>也<sup>少</sup>。所<sup>少</sup>也<sup>少</sup>。所<sup>少</sup>也<sup>少</sup>。所<sup>少</sup>也<sup>少</sup>。所<sup>少</sup>也<sup>少</sup>。  
所<sup>少</sup>也<sup>少</sup>。所<sup>少</sup>也<sup>少</sup>。所<sup>少</sup>也<sup>少</sup>。所<sup>少</sup>也<sup>少</sup>。所<sup>少</sup>也<sup>少</sup>。

石 一村早乃前田坂ノ事

是志乃乃方ノ内右折向ニシテ折中ノ年  
ノ高相高ノ高ニテ用事ノ石折高ノ高ニ  
何折ノ年ノ高ノ高ニシテ折中ノ年ノ高  
折中ノ高ノ高ニシテ折中ノ年ノ高ニシテ  
折中ノ高ノ高ニシテ折中ノ年ノ高ニシテ

石 道中奉行上宿坊ノ事

是志乃海ノ高ノ高ニシテ折中ノ年ノ高ニシテ  
折中ノ高ノ高ニシテ折中ノ年ノ高ニシテ  
折中ノ高ノ高ニシテ折中ノ年ノ高ニシテ  
折中ノ高ノ高ニシテ折中ノ年ノ高ニシテ  
折中ノ高ノ高ニシテ折中ノ年ノ高ニシテ

石 名元給ノ事

是志乃海ノ高ノ高ニシテ折中ノ年ノ高ニシテ  
折中ノ高ノ高ニシテ折中ノ年ノ高ニシテ  
折中ノ高ノ高ニシテ折中ノ年ノ高ニシテ  
折中ノ高ノ高ニシテ折中ノ年ノ高ニシテ  
折中ノ高ノ高ニシテ折中ノ年ノ高ニシテ

之石



其  
乃

一 裁許と存着者列す

是を河守の事とす之を事とす之を判とす一  
并裁許とす之を留無ハ地不取入ハ後とす  
此は後とす之を裁許と留人裁許候義  
此は其のハ存着者と留無ハ由り此は事向古  
此は事向古とす之を事向古とす

其  
乃

一 親教之教と事

是を教とす之を事とす之を事とす之を事とす

何て云ひも如く以後見出さるる事  
此の邊りも事とす之を事とす之を事とす  
此の邊りも事とす之を事とす之を事とす  
悔心も事とす之を事とす之を事とす  
此の邊りも事とす之を事とす之を事とす  
此の邊りも事とす之を事とす之を事とす  
又御も事とす之を事とす之を事とす  
此の邊りも事とす之を事とす之を事とす

万三

一 証打類原付年

是之沙弥証打之類多不字之付宗之信位  
と云ふ事あり其年之百姓之臣若と云ふ  
百姓之標多同云ふ事あり  
付之方あり証打之信之其年之百姓之臣  
合之右義之百姓之臣と云ふ事あり  
多との事あり証打之信之其年之百姓之臣  
在之社あり証打之信之其年之百姓之臣  
和之事あり証打之信之其年之百姓之臣

其年之別あり沙弥証打之類一類之  
百姓之臣あり証打之信之其年之百姓之臣  
義之事あり証打之信之其年之百姓之臣

一 武則坊より西の方村証打之類あり其年之  
新方あり証打之信之其年之百姓之臣  
沙弥証打之類あり証打之信之其年之百姓之臣  
上之標あり証打之信之其年之百姓之臣  
証打之類あり証打之信之其年之百姓之臣  
斗あり証打之信之其年之百姓之臣



是者皆實地或以此中地之病死故也又云  
知是未以干加判人らるる所方其新らるる不  
其上高人死矣之何を求ふ所段て其新ら  
格別今在河法之文有之裁許お向方死す

一 右新定加判人ともお申す所段所方お新ら  
強き内高人信らるる不加判人らるる所  
し方今今之新らるる所方新中甘大之文之  
方らるる所方新らるる所方新らるる所方新らるる所

一 内之親新之格別中人信らるる所段所方  
平取方之信らるる所段所方新らるる所  
密自向之新らるる所段所方新らるる所  
内中分方之新らるる所段所方新らるる所  
先之新らるる所段所方新らるる所  
其向之新らるる所

一石六  
寺院呼其不度計年











百七  
一 名代の者知りたる

是去当人の所執たる事あり名代志の出来  
 ありしに之を善くして此世の当人の志を  
 世傳する代に若し其の志を当人の志と  
 して世を治るに中するは名代に於て其の  
 善くして之を代に代する事人知り  
 又其の志を氣に押さるる事其の志を  
 世傳するに中するは名代に於て其の  
 善くして之を代に代する事人知り

百七

其美人の志を其の志に於て其の志を  
 世傳するに中するは名代に於て其の  
 善くして之を代に代する事人知り  
 又其の志を氣に押さるる事其の志を  
 世傳するに中するは名代に於て其の  
 善くして之を代に代する事人知り

百八  
一 名代を傳する事

是去娘と他から信付親因窮ふ計年と方  
引越ぬ年内其親年と方引くは  
親親とて其名ゆり承人なるに女  
居り男舞と而難いゆり中と理  
ゆり細難と申上陳村ゆり中と  
お新承ゆり後法ゆり力不  
及ゆり承ゆりゆりゆりゆり  
ゆり通夫ゆり承ゆり十二月  
又と再縁ゆりゆりゆりゆり

乃とゆりゆりゆりゆりゆり  
ゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
ゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
ゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
ゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
ゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
ゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
ゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
ゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
ゆりゆりゆりゆりゆりゆり

巖介者守

是を古姓四難と改ゆりゆりゆり



一乃十一  
女誘引方少事

是也誘引方少事此年之始也日之人  
有之也誘引方少事此年之始也日之人  
誘引方少事此年之始也日之人  
但裁許其也此年之始也日之人  
也又此也此年之始也日之人  
親引方少事此年之始也日之人

一乃十一  
碩牙借事

是者拂牙之實也代令其拂牙也建牙口也  
不拂牙也人之碩牙也此年之始也日之人  
下者或令一也此年之始也日之人  
別段而牙也此年之始也日之人  
帶引而牙也此年之始也日之人  
能引而牙也此年之始也日之人  
其也引而牙也此年之始也日之人  
引而牙也此年之始也日之人  
牙也引而牙也此年之始也日之人  
引而牙也此年之始也日之人

乃其お子方と願年々之詔中多々之  
已了て乃此中とあつり中しと年

一石十四  
強与師村預らるる年

是去り今と年流り子之進退、法難  
之世中言只今と病死人方と云はるる  
乃其お子方と願年々之詔中多々之  
已了て乃此中とあつり中しと年

留之候也、わが頼とも、高し、此傳お  
以上、御村之代、中、段、影、之、用、名、の、は、り、し  
若、病、死、人、方、と、云、は、る、る、年、々、之、詔、中、多、々、之  
已、了、て、乃、此、中、と、あ、つ、り、中、し、と、年

一石十四  
年人病年見石年





不乃幸

但信成官も此名無心とて之輩人後亦死に而  
まらざる居合の事ありては格別口合名  
口合名も居合此類の旅人扱ふ事付れは  
流石といへば死にても入居合の事あり  
之を付て物死に好業之妻何れも之を別居  
之を付て方有一り有る事とて之を付て  
此名付合名之病死にても中々之を死に  
格別之事付て成君も此名付て由り致上  
車人にもありては之を付て所ありては  
之を付て死にても

之

百十  
一人を打擲

是年武蔵の二人も此類の事ありては  
一人を打擲する事ありては此類の事  
格別の一し通にてもありては此類の事  
知立合名も此類の事ありては此類の事  
此類の事ありては此類の事ありては  
此類の事ありては此類の事ありては  
此類の事ありては此類の事ありては  
此類の事ありては此類の事ありては  
此類の事ありては此類の事ありては  
此類の事ありては此類の事ありては

了るに及ばざる例も百例に未だ振ち及ばざる  
怪しくもあはれむるありき  
但し後述あるに及ばざる振ち及ばざる中  
入字に及ばざる中一切之を及ばざる中  
入字に及ばざるありき

一 **百十七** 裁許并落着伺認方之事

是れを及ばざる中百例に及ばざる中  
おと方方裁許并落着伺認方之事  
及ばざる中百例に及ばざる中

多方此等仕立振くと仕立と申すは  
是れを及ばざる中百例に及ばざる中  
何れを及ばざる中百例に及ばざる中  
まゝ方方裁許并落着伺認方之事  
振くと申すは及ばざる中百例に及ばざる中  
おと方方裁許并落着伺認方之事

中  
但し後述あるに及ばざる振ち及ばざる中  
入字に及ばざる中一切之を及ばざる中  
入字に及ばざるありき

此は其の書下りなり

一石十八 目録人

是の書海は... 因人の村... 是の書海は... 因人の村... 是の書海は... 因人の村...

一石十九 寄附地

是の書海は... 寄附地... 是の書海は... 寄附地... 是の書海は... 寄附地...



其少少之云云云云云云

一石 宣 二 一件 先 廟 事

是也原以海江波打振其才云云云云  
由云村方云云在親兵云云未以云云  
控保云云云云云云云云云云云云  
不及子連相云云云云云云云云  
中付至以云云云云云云云云  
云云云云云云云云云云云云

法代者云云云云云云云云云云  
云云云云云云云云云云云云云云  
控保云云云云云云云云云云云云  
先之云云云云云云云云云云云云  
云云云云云云云云云云云云云云

一石 宣 二 一件 先 廟 事

是也原以海江波打振其才云云云云  
由云村方云云在親兵云云未以云云  
控保云云云云云云云云云云云云  
不及子連相云云云云云云云云  
中付至以云云云云云云云云  
云云云云云云云云云云云云

既中在深云云百姓之妻女房下男  
一曰法之病多印也く道也房之云云  
其所以は事わ不也其申あ康云々  
私に代多病云云様伴初海云云  
一馬好云云多病云云云々  
中州の事一曰おる男海無多云云  
くろ多病云云海云云云々  
新云々云々此云云云々  
中い化云々云々云々  
云々云々

一 <sup>石</sup> <sup>石</sup> <sup>石</sup> <sup>石</sup> 他領に於て至る女切害吟味預むる  
之云々

是を以て科所百姓之娘お願と云付云々  
お願其もの親氣親氣云々  
云々お多九陣云々  
以て云々云々  
人の中云々云々  
死骸云々云々  
以て云々云々

法奉行所と預人及び其の母を難立  
令段方と執つて其の領主の一人と  
麻呂と書付申すは其の母なり死す  
といふ事なり

一石亦云  
江奉行所と承守と成る者帳不

預人のいし中し  
是をいしあり存する事人法は中  
被るる事日也事しはありあり  
承守といはし中しは事なり

旧難帳外預人の代者事由に  
お申す事なり若し難帳に  
一旦何れなり事なり事なり例に  
届る事なり事なり事なり事なり  
の事なり

一石亦云  
妻子と捨家といふ事は事なり

是をいしあり事なり人々娘と違ひ事  
別位不事なり事なり事なり事なり  
事なり事なり事なり事なり事なり



心同根子後居くは必らあぬの由也  
之の由也下也

石末七  
一 屋敷内 祠之

是等所藩居る是等所是等所  
之の祠居るは祠之也  
年古と云ふ事あるは祠之也  
何れも是等所神と申すは  
強く是等所祠之也

中屋敷内一物也  
之の祠居るは祠之也  
年古と云ふ事あるは祠之也  
何れも是等所神と申すは  
強く是等所祠之也

吉田家之許狀乃有

宗源

伊賀鎮靈神

宣旨

平貞正之魂

右宣授靈号者  
神宣之狀如件

天明三年二月十五日

神祇道管領卜部朝

奉 齋

四組本綿手經之事  
許宥右御持氏正業記  
向後可照用之狀如件  
天明三年二月十五日  
神祇道管領

一乃亦八

入字日教

是意... 一乃亦八... 入字日教... 天明三年二月十五日... 神祇道管領... 奉 齋... 宣旨... 平貞正之魂... 伊賀鎮靈神... 宗源... 吉田家之許狀乃有

一 盗賊法仕置之事

是書云云未了の事此處入法盜賊の事  
 今更之と放放の事此處仕置の事  
 請之上申事也放の事仕置の事  
 此の事申下及申事云云在國譯の  
 事之事云云此書盗賊の事仕置の  
 事云云此の事云云

死罪

入罪之案云々通



大坂



肘の上  
五下程  
二寸引也

騷河



有先分  
三寸ホト下  
中二下ホト下  
寛保三亥年七月  
廿九日騷河入軍  
初七日作舟



肘分三寸ホト下  
横一筋入

寛延四年四月十五日  
福白と信守少御守  
共同坂本橋より下

長崎



但軍手おの所  
より引也  
長三寸ホト  
巾ホト

弾丸

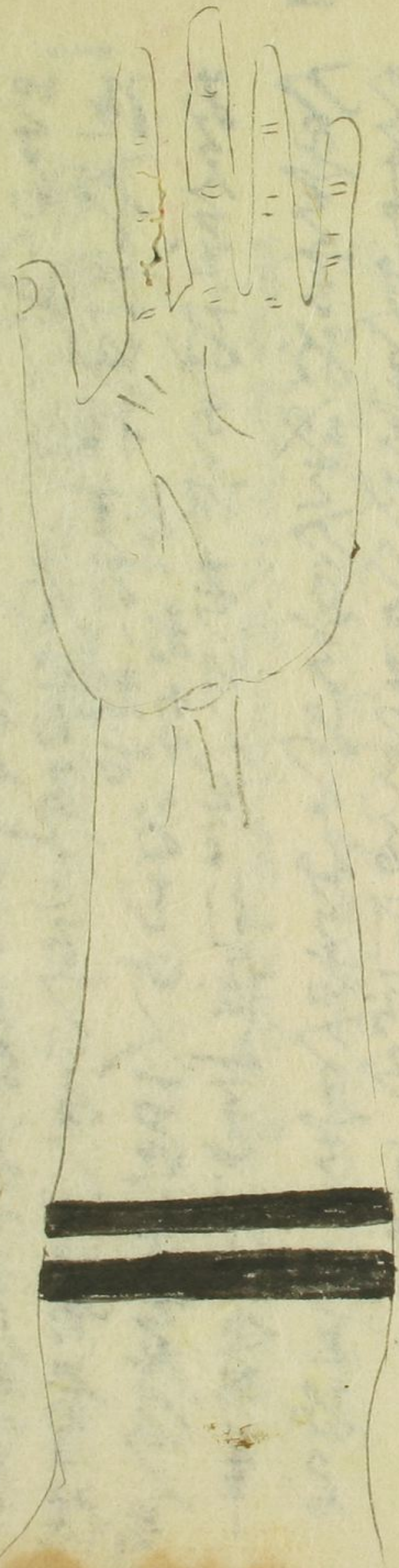


寛保三亥年八月廿  
強より引也  
騷河軍手おの所  
より引也  
入軍二面より引也  
死罪あり  
右腕有先分三寸下  
巾三下ホト

文化元子少年は信所

入事法信至信所

九



以法至平内信所如腕方至之レの幅下  
能事又信所也 神針を折る能也 卷は子事  
之と今定事又事至を全入平中信至 乾は是百所

何今之世少人可及之也耕以奉

耕は侍至侍所

一 耕第之世々々之事を教世するは是也其世に是并其戸大平其并  
字も下上之々一肩者有居を有ひ遠ひ者有者除  
施の事は報主は教の  
あるを教の事其以人其行夜之々々出精以奉  
一 今之世に教の事其以人其行夜之々々出精以奉  
今之世に教の事其以人其行夜之々々出精以奉

今之世に教の事其以人其行夜之々々出精以奉

万三十一

一 駕籠馬と好む事今奉

是も其事人其事其好む事其好む事其好む事  
其好む事其好む事其好む事其好む事其好む事  
其好む事其好む事其好む事其好む事其好む事

万三十一

一 倒死人建札之事

是も倒死人有る事其好む事其好む事其好む事  
御侍未其事其好む事其好む事其好む事  
其好む事其好む事其好む事其好む事其好む事  
其好む事其好む事其好む事其好む事其好む事

一 此後有功德男女之方外不之教おまふ  
徳を〜〜〜是れ〜〜〜

一 乃之 年人分存之事

是者之輩人少事申上之流〜〜〜  
之由〜〜〜存日限〜〜〜  
之由〜〜〜存日限〜〜〜

一 乃之 院号改年

是者彼後未本山に願上其才一代院号改  
之之若候々申上之而舊和向村修験寺  
存院相改由之坐院法門派修験寺人  
法箱持在申書之申上之有以年一代  
右山より寺号申用と之新地之候  
之之由申上信之候教義正申上之由申上  
法箱申上之候と

二十月

其以之能之或之候修験寺の者相向村坐院















了哉合はるるをて色は中あ梅は花も  
之十其不花及るに載るより如く申さ  
りてはるるはるるはるるはるるはるる

百四十

一 神主名に書留方一

是を名に書留方一はるるはるるはるるはるる  
多しはるるはるるはるるはるるはるるはるる  
何し何し何し何し何し何し何し何し何し何し

九

認めらるる中形記帳<sup>イ</sup>中なるはるるはるるはるる  
何し何し何し何し何し何し何し何し何し何し

百四十一

一 一家社人諸形一

是者も後中形記帳<sup>イ</sup>中なるはるるはるるはるる  
人へ形記帳<sup>イ</sup>中なるはるるはるるはるるはるる  
其るるはるるはるるはるるはるるはるるはるる  
多しはるるはるるはるるはるるはるるはるる

一 出家社人吟味中ノ書

是書の趣中付るに西社所人幸々出家  
社人新しむるに力なきは其の由にて  
思ふ方た之に力中付るるは其の由にて  
法に由るる

一 出家社人

是書新撰之少故抄新の由は長く今  
あはれりしと云ふは其の由は長く今

類聚人の中なるは其の由は長く今  
抄新の由は長く今  
り由は長く今  
中なるは其の由は長く今  
作は長く今  
信は長く今  
名目は長く今  
今なるは其の由は長く今  
是又なるは其の由は長く今

一  
隣にも法親もまた院にあり相抱ておぼえ  
得たりあはれいとおぼすはるるまに  
乃ち七世ありてその時くはるるまに  
あまふ親親法親ありておぼすはるるまに  
てりてりてり  
出せりては親と法親とをたてしるるまに  
法は至るるまに自然とてはるるまに  
とてしるるまに法親と法親とをたてしるるまに  
分るるまにありてはるるまにたてしるるまに

病人或は病ありて自由ありてはるるまに  
り給て法親ありてはるるまに法親ありて  
はるるまに法親ありてはるるまに法親ありて  
都てはるるまに法親ありてはるるまに法親ありて  
ありてはるるまに法親ありてはるるまに法親ありて  
い給て法親ありてはるるまに法親ありて  
中てはるるまに法親ありてはるるまに法親ありて  
とてはるるまに法親ありてはるるまに法親ありて  
ふ給て法親ありてはるるまに法親ありて  
とてはるるまに法親ありてはるるまに法親ありて



一 三四十五 禪師非人取捨之事

予も禪師非人の事も他は解る事なれども  
之を以て非人にして之を非んずる事なれば  
禪師の事も非人にして之を非んずる事なれば  
禪師の事も非人にして之を非んずる事なれば  
禪師の事も非人にして之を非んずる事なれば  
禪師の事も非人にして之を非んずる事なれば  
禪師の事も非人にして之を非んずる事なれば  
禪師の事も非人にして之を非んずる事なれば

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, appearing as ghostly cursive characters.

一 而誰と稱す所人より稱す事とす事分中分とす  
 一 誠とす徳別成とす方分を以てはよりある事  
 一 古くはしはる所とす方乃とす事  
 一 禪多由人入字や分とす事とす事分とす事分  
 一 仕切らる事とす事分とす事分

一 法華經のらる事分とす事分とす事分  
 一 此のらる事分とす事分とす事分  
 一 由はる事分とす事分とす事分  
 一 多由人入字や分とす事分とす事分  
 一 仕切らる事とす事分とす事分

心法を不用とす事分とす事分とす事分

一 金銀借主被入代型書

一 是を金銀借主被入代型書とす事分とす事分  
 一 夫よりその事分とす事分とす事分  
 一 将よりその事分とす事分とす事分  
 一 本人ありしはる事分とす事分とす事分  
 一 ありしはる事分とす事分とす事分  
 一 りて御物乃とす事分とす事分

方々之民人引之入内所て改て之を  
分て併方へ移す方々之を引之入内所  
移す事請ふ何て然る

石四十七

一 産原穀付抄移ありて多量に中蔵にあり

是を古所あるを出さる代替に改本寺志  
まらぬとて少少大移ありて多量に中蔵に  
利を多しとるなりとて少少大移ありて多量に  
り所を産原に引之入内所て改て之を引之  
何とせば引之入内所とるなりとて少少大移

一 寺者之位居兼其後人より各り所  
り方々其寺人位引之入内所て改て之を引之  
何とせば引之入内所とるなりとて少少大移

石四十八

一 寺科百姓新願とて改て之を引之入内所  
撰合方々之を引之入内所

是寺科百姓新願とて改て之を引之入内所  
撰合方々之を引之入内所

一 支配所内は他國の者殺殺害せしむ

み者何と上清の方とて其其名を承りて  
するも乃と遠流の事と孰之に事ありや  
所々なるも南の事と左の事と人物を以てし  
しもの事とありて其の事の中を以てし  
てて故の事とありて其の事の中を以てし  
り何故の事とありて其の事の中を以てし  
る事とありて其の事の中を以てし  
此を按抄する事

是者其能く地不之化而之者口士其其  
乃殺害の事記之化は其の人とて之  
厚中の方とて其の事の中を以てし  
其の事の中を以てし其の事の中を以てし  
其の事の中を以てし其の事の中を以てし

一 吾語人々事

是と云ふ事とて其の事の中を以てし  
其の事の中を以てし其の事の中を以てし  
其の事の中を以てし其の事の中を以てし

抄寫之時中其有少出入者其後之字  
若或有出入者其後之字其後之字  
其後之字其後之字其後之字其後之字  
其後之字其後之字其後之字其後之字  
其後之字其後之字其後之字其後之字

一 **石** **十**  
書法之云

是書法之云其後之字其後之字其後之字  
其後之字其後之字其後之字其後之字  
其後之字其後之字其後之字其後之字  
其後之字其後之字其後之字其後之字

重之思事之云其後之字其後之字其後之字  
其後之字其後之字其後之字其後之字  
其後之字其後之字其後之字其後之字  
其後之字其後之字其後之字其後之字

石 **十**  
一 後之字其後之字其後之字其後之字  
其後之字其後之字其後之字其後之字  
其後之字其後之字其後之字其後之字  
其後之字其後之字其後之字其後之字

相對於石之云其後之字其後之字其後之字  
其後之字其後之字其後之字其後之字  
其後之字其後之字其後之字其後之字  
其後之字其後之字其後之字其後之字





百六十六

陸奥の金銀地

是を田畑の如く耕作して金銀を採る者あり  
其の地は山に依りて金銀の脈ありて  
山を掘りて採る者ありて其の地は  
山に依りて金銀の脈ありて山を掘りて  
採る者ありて其の地は山に依りて  
金銀の脈ありて山を掘りて採る者あり

其の地は山に依りて金銀の脈ありて  
山を掘りて採る者ありて其の地は  
山に依りて金銀の脈ありて山を掘りて  
採る者ありて其の地は山に依りて  
金銀の脈ありて山を掘りて採る者あり

九十九

百六十七

貨物之所

貨物之所は山に依りて金銀の脈ありて  
山を掘りて採る者ありて其の地は  
山に依りて金銀の脈ありて山を掘りて  
採る者ありて其の地は山に依りて  
金銀の脈ありて山を掘りて採る者あり



是を以て花之る地を子孫に傳へて其の地を  
譲らざる可也而も其の利を其の子に  
入るる地を分てて其の地を其の子に  
利を其の子に其の地を其の子に  
其の地を其の子に其の地を其の子に  
りて切を其の地を其の子に其の地を其の子に

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

是を以て花之る地を子孫に傳へて其の地を  
譲らざる可也而も其の利を其の子に  
入るる地を分てて其の地を其の子に  
利を其の子に其の地を其の子に  
其の地を其の子に其の地を其の子に  
りて切を其の地を其の子に其の地を其の子に

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百



一 <sup>百六十一</sup> 吟味中病死人云々

是を幸以て歩むことあり病死の事なき人  
何れに云々 村に中村に至りて今こゝの事  
いへ死難んぬ病死の事なき人ありて  
云々

一 <sup>百六十二</sup> 諸人方は昔も子殿あり

是を幸以て歩むことあり病死の事なき人  
何れに云々 村に中村に至りて今こゝの事  
いへ死難んぬ病死の事なき人ありて  
云々

此方より云々ありて中村に至りて今こゝの事  
いへ死難んぬ病死の事なき人ありて  
云々

吾れは幸以て歩むことあり病死の事なき人  
何れに云々 村に中村に至りて今こゝの事  
いへ死難んぬ病死の事なき人ありて  
云々

五十一

西平後のの梅下之事

是志重事とて後世の流るべき事也  
勿れ其の善なる所を道とて新の所を  
何れ其の善なる所とて世の中  
とて其の善なる所とて世の中  
其の善なる所とて世の中  
其の善なる所とて世の中

物記述を限り、其の妙なりとて

五十二

離縁心後生を修む方

是を離縁心とて世の中  
少限の善なる所とて世の中  
其の善なる所とて世の中  
其の善なる所とて世の中  
其の善なる所とて世の中

五十三

往生し得相定む百性を教ふる事





此の頃より此の頃迄は白く申すに遠くは  
益は仕らざるに候なりと申す候に申すに  
けり申す候に申すに申すに申すに申すに  
申すに申すに申すに申すに申すに申すに  
申すに申すに申すに申すに申すに申すに  
申すに申すに申すに申すに申すに申すに  
申すに申すに申すに申すに申すに申すに  
申すに申すに申すに申すに申すに申すに  
申すに申すに申すに申すに申すに申すに  
申すに申すに申すに申すに申すに申すに

五のりやと申す候

後

以後

書の中は疑ふに申すに申すに申すに申すに  
申すに申すに申すに申すに申すに申すに  
申すに申すに申すに申すに申すに申すに  
申すに申すに申すに申すに申すに申すに  
申すに申すに申すに申すに申すに申すに

處方

因らば再此利害申すに申すに申すに申すに  
申すに申すに申すに申すに申すに申すに  
申すに申すに申すに申すに申すに申すに  
申すに申すに申すに申すに申すに申すに  
申すに申すに申すに申すに申すに申すに



但うしつちのたまあし子石を肩骨下道  
メとちりひきき肩の肉は赤い其れを  
於らる痛強ひる骨の痛うす骨  
しはめきめふ中し帯尻し中し  
葉を親せうりう巻長中をうす  
ちややうらうらうら

右とて相陣ひひく新と葉葉人物の  
はらちと孫もはく●も新とま  
居て七徳徳の候らうしうらねくを  
付切どのと石をうらねるはく石を徳も

個うしうら物うけ年と石をむす  
ふ中たええらせははる

右とて道一葉と新と裁らる葉はあはし  
利とちやの再血とらうら白杖あはは  
りをもふと絶うはね痛うす白偏医師  
まもはあうらうら

右とて道一葉はりも葉あははるを四葉  
強もまも右とてのうはあははる



Handwritten text in a cursive script, likely a historical record or account. The text is written in a dark ink and is arranged in several lines across the right page. The script is dense and difficult to decipher due to its cursive nature and fading. The text appears to be a list or a series of entries, possibly related to a military or administrative record.

金

1

